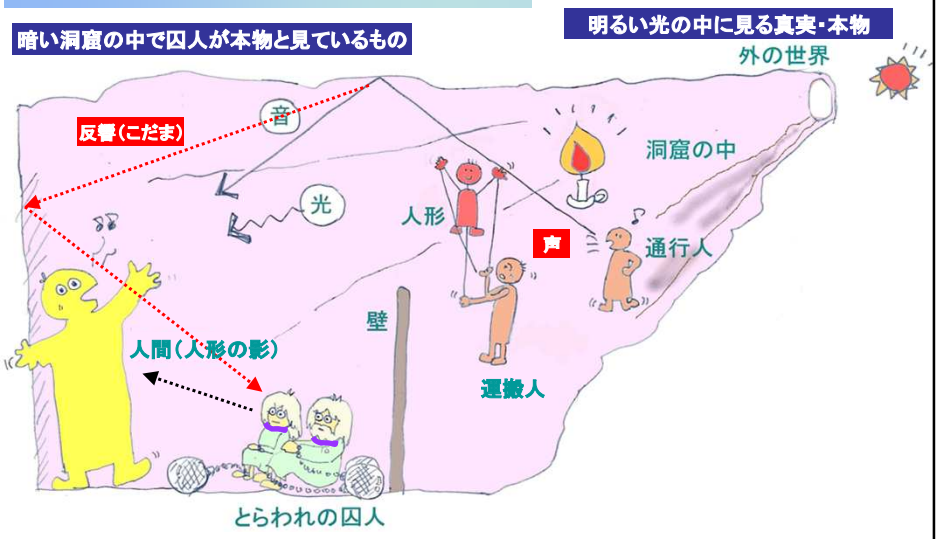
プラトンの洞窟



プラトンの洞窟

① 枷をはめられた囚人は、壁に投影された影を本物（石製、木製、その他）と考え、反響してくる音を声と考える。
② 囚人の戒めを解いて、無知を治癒しようとして外へ徐々に連れ出すと、光がまぶしすぎるので、影の正体を見ても見分けがつかない。実際にあるものを正しく見ていると告げても、かつて自分の見ていたものを本物（真実のもの）と考える。
③ 光を直視できないので、見分けのつくもののほうに逃亡を図る。
④ 無理に、洞窟の外の太陽の光のある場所に引き出すと、目がくらみ、これが真実本物だと言われてもひとつも見ることが出来ない。
⑤ 馴れるために、本物の影を見分け、次に水に映る人間やその他の映像を見分け、その後実物という順序となる。
⑥ 月の光、星の光に目をやり、天体や大空そのものを眺める。
⑦ 太陽そのものを見分ける。
⑧ 洞窟に逆に戻ると、解放された囚人が見たものは、中にいる永遠の囚人にすべて否定され、殺されることにもなる。